

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

47

「ああ、優子、ありがとう。僕もずっと、ずーっとそう思っていたんだよ。」

そういうと、再び和樹が唇を合わせてきた。

「ちよ、ちよつと和樹さん！もう帰るのよ！」

「あーごめん、ごめん。もう、嬉しくて。」

そう言うのと、二人は急いで和樹の車に乗り込んだ。

しかし、また再び、和樹が運転席から身を乗り出してきて、助手席の優子を抱き締めた。

和樹の胸に耳を当てていると、和樹の心臓の鼓動が「ドク・ドク・ドク・ドク・ドク・ドク」とものすごいスピードで打つのが聞こえてきた。優子は「和樹さんの心臓が止まっちゃったらどうしよう?」と心配になると同時に、優子を抱き締めることのできるくらいにドキドキしてくれているんだと思うと、なんだか嬉しくなってきた。

三たびキスをしながら、和樹の手が優子の頭、首、背中と移動して、肩をなぞり、二の腕をなぞり、その手がつと前に回って、優子の胸を軽くタッチしてきた。

「和樹さん!!」と優子は慌てて、和樹の手を振り払った。

「もう！和樹さんのエッチ！なんてことを・・・。」

「ごめん、ごめん！でも男なら誰でもそうだよお。」

「もう！ダメよ。本当に帰らないと二度とこんな風に出かけられなくなるわ。」

(続く)